

地域情報（県別）

【東京】ひと昔前の「普通の女性」が成り立たない今、産婦人科に求められる診療は-井上裕子・井上レディースクリニック院長に聞く◆Vol.1

2019年9月16日(月)配信 m3.com地域版

日本では今、少子化が進み、高齢出産が増えていると言われる。これらの影響を受けやすいであろう産婦人科では社会状況の変化をどう感じているのだろうか。また、そうした変化に伴い、求められる診療のあり方も変わっているのか。「女性総合診療科」をテーマに掲げ、婦人科の診療や予防医療にも力を入れる「井上レディースクリニック」（東京都立川市）の井上裕子院長に聞いた。（2019年5月14日にインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——「少子化」と「高齢出産」が進んでいると言われますが、現場でも産婦人科を取り巻く変化としてこれらは実感するのでしょうか。

少子化は現場でもすごく実感しますね。当院は1923年に私の祖父が立ち上げたクリニックで、私が3代目院長として1990年に継承したのですが、お産の数は10年ほど前に比べて4割ほど減りました。地域の医療環境の変化も影響しているでしょうから単純に少子化だけを原因に挙げることはできませんが、月に50件ほどだったのが現在は30件ほどです。

高齢出産も同様です。女性の社会進出や晩婚化を背景に日本における初産の平均年齢は30歳を超えていると言われていますが、当院の患者さんの場合、35歳近くに及びます。当院では不妊治療も行っている所以他们も影響していると思われませんが、医療的な介助が必要な難産は増えています。



井上裕子院長

——やはり現場でも変化を切に感じるのですね。患者個人についても何か変化は感じられますか？

運動不足で体力に乏しく、精神的な問題を抱えやすいほか、インターネットの情報を過信する方が増えたように思います。

パソコンやスマートフォンの普及によって移動しなくても仕事ができるケースが増えたため自然と体を使う機会が減り、体力がつきにくくなりましたし、また不妊治療を受けたり高齢出産にのぞんだりすることに伴って精神的なストレスを抱えやすくなりました。

それらに加えて、今はインターネットを使えば妊娠や出産に関することを手軽に知ることができます。玉石混交の情報の中で何を信じていいかわからなかったり、誤った情報を鵜呑みにしていたりする人もいます。これは何も患者さん側だけに問題があるのではなく、インターネットの中に出される情報に偏りがあるからではないかと私は考えています。

例えば、陣痛促進剤ひとつにしても使わないといけなかったケースと使って良くなかったケースの両方があるわけですが、ニュースというのは何らかの問題を取り上げる性質がありますから、どうしても後者の情報が多くなってしまっているのではないのでしょうか。

——すると、医療者としての説明力やメンタル面のケアなど、産婦人科医に求められることは増えた、ということでしょうか。

そうですね。要は、「女は結婚をして子どもを生むのが当たり前」とされる時代ではなくなったのです。30～50年前に比べると、女性の生き方に多様性が生まれ、当時に「普通」と言われていた価値観は変わりました。

ずっと独身でいる人が増え、シングルマザーや国際結婚も増えました。女性のライフスタイルが変わったため、産婦人科としても多様な診療が求められるようになりました。出産に当たっても、「出産は病気じゃないから自然に任せた方がいい」という考えをよりどころとするのではなく、心身共に個別具体的なサポートが必要な人が増えたのです。



運動療法を行うために設けられたプール

——ホームページで「女性総合診療科」をうたっているのはそういった背景があるからですか？

はい。勤務医時代から感じていたことですが、患者さんはさまざまなお悩みを訴えられるんです。「セックスがうまくできない」「生理痛がひどい」といった産婦人科に絡むものだけではなく、ご相談の内容が内科や皮膚科、精神科などの領域に関わることもしばしばでした。

でもそれって、ごく自然なことですよ。人間は臓器で分類できないわけですから。それに、そもそも私が世話好きな性格ということもあって、「私の代になったら地域の女性に寄り添うかかりつけ医をめざそう」と考えていました。「女性総合診療科」として、思春期から更年期、高齢期までをトータルに診る産婦人科にしようと思ったのです。

——なるほど。では、お父さまの代までとは患者層も変わったのですか？

父の代まではお産がメインでしたが、現在は婦人科の患者さんの方が多く、割合としては婦人科が約8割、産科が約2割です。1日の来院数でいうと、婦人科が80～90人ほど、産科が20～25人ほどですね。産科から婦人科に移行される患者さんも多く、当院で出産された方が更年期障害に関するご相談をされたり、乳がん・子宮がんの健診を受けてくれたりしています。

当院としては婦人科の中でも特に病気の予防を推進したいので、健診には力を入れています。一般的に産婦人科では乳腺を診ない傾向にありますが、当院では6人の常勤医の中に乳腺の専門医もいるので対応が可能。マンモグラフィーの検査も年間5000件ほど行っています。

また、働く女性が利用しやすいよう、立川駅の近くで婦人科の分院「リボンレディースクリニック」を運営していて、そちらでは土曜日と第2日曜日も診療しています。私も日曜日に診療しています。

◆井上 裕子 (いのうえ・ゆうこ) 氏

1977年共立女子大学文芸学部を卒業。1984年帝京大学医学部を卒業。祖父の代から続く産婦人科を継承し、1990年に「井上レディースクリニック」（東京都立川市）院長に就任。以来、「地域の女性に寄り添うかかりつけ医」をテーマに婦人科の診療と予防医療にも注力。コミュニティカフェを運営し、NPO法人「マザーシップ」の代表としてイベントを開くなど地域に向けた活動も行う。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

